

博物館ノート

江戸時代の若松城下

陸奥之内会津城絵図

江戸幕府は、藩境・道路・山川などの変化や新田開発に伴う石高の増加などを把握するため、諸大名に命じ、正保元年（一六四四）、元禄九年（一六九六）、天保六年（一八三五）の三度に亘り国絵図を作成させました。このうち、最初の正保の時には、

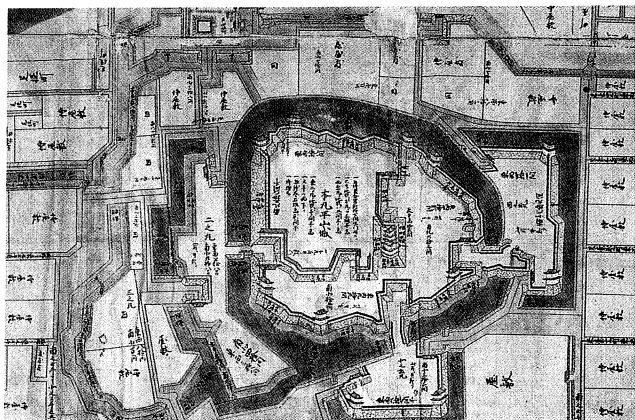
諸国の城郭とその周辺地域を描いた城絵図も同時に作られました。

写真の「陸奥之内会津城絵図」は、命を受けた会津藩が、正保三年に幕府に提出した所謂「正保の会津城下絵図」で、故山口孝平氏（会津若松市）が寄贈されたものです。この絵図は、幕府の絵師成田市之丞によって仕上げられた縦二・五五び、横三・〇二びの大きなものです。

お城の名称は、現在「若松城」とか「鶴ヶ城」とか呼ばれていますが、この資料の表題から、江戸時代には「会津城」が正式な名称であったことがわかります。

会津藩二十三万石は県内最大の藩で、その中心地若松は、東西四・二キロ、南北三キロの大きな城下町でした。絵図からも、お城を中心に、土手と堀によって、藩士の居住する郭内と、町人や下級藩士の居住する郭外に分けられ、都市計画に基づいて整然と区画されていたことがわかります。

この絵図は、加藤明成が寛永年間（一六二四～一六四二）に会津城を増改築した以降の城下絵図としては、現存する最古の貴重なもので、戊辰戦争の時、会津攻撃のために西軍が携行していたものと伝えられています。



写真説明

▶城郭付近(部分)

▼陸奥之内会津城絵図

